
日本と世界の宗教文化

—問題を解きながら学ぶ—

- [13] 日本において神道と仏教は歴史的に深い関係をもってきたが、それに関する説明として適切なものを、次から2つ選びなさい。
- ア 神道は日本古来の宗教で、人々に深く信仰されていて、仏教から影響を受けたのは鎌倉時代以降である。
 - イ 日本の仏教寺院は日本の風土に適した建築にしようと、神社建築を大幅に取り入れて、日本独特の建築様式となった。
 - ウ 仏教は古代に日本にもたらされたが、それ以前に日本には神々への信仰が存在していた。
 - エ 明治政府は神仏習合状態を変えようとして神仏分離を行い、神社と寺院は明確に分けられることになった。
 - オ 神仏習合状態は長く続いたので、今でも浄土宗や浄土真宗などのお寺では、天照大神をまつているところが多い。

【解説】神道は古代より仏教から大きな影響を受けてきた。神社の建築様式も仏教の伽藍建築に影響を受けるようになった。平安時代には神々への信仰と仏への信仰の習合が広く見られるようになった。しかし、明治政府はこうした神仏習合状態を解消しようという考えをもち、それを具体的に推進して神仏分離が行われた。今日では寺院においても神仏習合的な様相はあまり見られなくなった。

- [14] 神仏習合に関する説明として、適切なものを次から2つ選びなさい。
- ア 平安時代までは神と仏は別のものとして考えられていたので、神仏習合はまだみられなかった。
 - イ 神前読経というのは、神に対して僧侶が仏教の経典を読むことである。
 - ウ 江戸時代に檀家制度（寺請制度）が成立すると、神仏習合状態はしだいになくなっていった。
 - エ 明治政府はそれまでの神仏習合状態を解消するために神仏分離の令（神仏判然令）を出した。
 - オ 戦後は、政教分離を徹底させるため、宗教法人法により檀那寺という制度が廃止された。

【解説】神仏習合のはじまりは、奈良時代にさかのぼることができる。八幡神が東大寺の大仏建立を援助したと伝えられるように、神が仏を守護するという考えもあったが、神も人と同じように悩む存在であるので、仏の力で解脱させなければいけないという「神身離脱」という考えも出てきた。その神のために僧侶が読経するのが神前読経である。仏が日本の人々を助けるために仮の姿で現れたのが神であるという本地垂迹説も生まれる。しかし維新政府から1868年に神仏判然令が出され、神仏習合の状況は変わるようになった。

- [15] 明治維新时期に神仏分離の令に基づく神仏分離が行われたが、これに関する適切な記述を、次から2つ選びなさい。
- ア 神仏分離とは仏教を日本から排除する運動で、廃仏毀釈ともいわれた。
 - イ 神仏分離が行われた神社では、仏像の代わりに神像を安置することが積極的に進められた。
 - ウ 神仏分離の結果、仏像や仏画などが日本から流出し海外の美術館などに収められている例がある。
 - エ 神仏分離の結果、神社名や神社の祭りから仏教的色彩はすべて除かれるようになった。
 - オ 神仏分離による廃寺の影響で僧侶が葬儀に関与しなくなった地域で、それまでの仏教式の葬儀から神葬祭にかえるということもみられた。

【解説】江戸時代の国学の興隆のなかで、神道について仏教色のない本来の姿に戻すべきだということが論じられるようになった。1868年に維新政府は「神仏分離の令（神仏判然令）」を出す、これは神と仏、神社と寺、神道と仏教を明確に区別しようとしたものであった。権現といった仏教風の神号も禁じられた。一部の地域では、それが廃仏毀釈という流れを生み、仏像の破壊や仏具、仏画の廃棄といったことを招いた。なかには破壊を免れ、海外に渡ったために現在でも目に触れることができるというものもある。

- [16] 明治以降の神道についての適切な説明となっている記述を、次から2つ選びなさい。
- ア 明治政府は官幣社、国幣社という制度をつくり、それぞれに大社、中社、小社の別をもうけたが、伊勢神宮はこれらに含まれず、別格扱いであった。
 - イ 明治政府は神道を国教と定め、すべての国民がこれを信仰するように求めて、各家庭に神棚をもうけることを義務づけた。
 - ウ 戦前には神道十三派と呼ばれる教派があり、黒住教、天理教、金光教などはここに含まれていた。
 - エ 第二次大戦後、信教の自由が原則となり、戦後まもなくから伊勢神宮への参拝者が急増した。
 - オ 明治時代に設立された神社本庁は、全国の神社を管理する役をになうこととなった。

【解説】明治政府は当初、神道による国民教化と神社制度の整備を行う。前者は頓挫。神棚設置の義務付けはない。1871年の制定時には官幣社、国幣社それぞれに大社、中社、小社の別があったが、後に別格官幣社が加わった。伊勢神宮は別格で社格制度の外にあった。神道十三派は明治政府が教派神道として一派独立を公認した諸教派の総称。第二次大戦後の1946年、神社の国家管理を禁じた神道指令後の神社の組織化のため、神社関係者が設立したのが神社本庁である。

[173] 次はそれぞれの宗教の創始者に由来するとされている言葉である。これらのうちブッダの言葉とされているものを2つ選びなさい。

ア「天上天下、唯我独尊。」

イ「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。」

ウ「すべての現象はうつろいゆく。おこたらずに精進せよ。」

エ「汝らに禁じ給うた食べ物といえば、死肉、血、豚の肉、・・・。」

オ「人の欲せざる所、人に施すこと勿かれ。」

【解説】「天上天下、唯我独尊」はブッダが誕生した際に述べたと、後に信じられるようになった言葉である。「すべての現象はうつろいゆく・・・」は、ブッダが入滅の前に述べたとされる最後の言葉である。「一粒の麦は・・・」はイエス・キリストの言葉として知られている。「汝らに禁じ給うた食べ物・・・」は、豚の肉で推察されるが、コーランの言葉である。「人の欲せざる所、・・・」は孔子の言葉を集めた『論語』にある言葉である。

[174] 宗教の教典（聖典、経典）、ないしそれに類する書についての適切な記述を、次から2つ選びなさい。

ア『法華経』はブッダの生涯を細かに記した経典で、ブッダの伝記はこれに基づいている。

イ「ヨハネの黙示録」は新約聖書の最後におかれているが、これはイエス・キリストの言行を記したものではない。

ウ「モーセ五書」と呼ばれる書は旧約聖書に含まれるが、その最初にあるのは天地創造の話などが記載されている「創世記」である。

エ コーランは、ムハンマドが神から受けた啓示を記しているが、ここには旧約聖書や新約聖書などに類似する話は一切なく、きわめて独自な内容となっている。

オ『古事記』の神代巻には神武天皇が神から受けた諭しをもとにまとめた話が記されている。

【解説】『法華経』はブッダの死後数百年を経て成立したもので、その生涯の詳細を記したものではない。コーランには旧約聖書や新約聖書に関する記述もあり、イエスもアブラハムやモーセと共に預言者の1人として描かれている。「モーセ五書」はユダヤ教では「トーラー」とも呼ばれている。古事記の神代の巻に記されているのはイザナミ・イザナギにはじまる神話で、神武天皇の登場より前の時代のことである。

[175] 宗教の儀礼について正しく述べたものを、次から2つ選びなさい。

ア 涅槃会と呼ばれる仏教行事は、釈迦が生まれた日を祝う行事である。

イ 春に行われる復活祭はイースターともいわれるが、これはキリストの復活を記念して行う行事である。

ウ 節分に豆をまくのは、今年も豊作になりますようにとの願いをこめたものである。

エ 過ぎ越しの祭りはペサハと言われるものであるが、ユダヤ教徒にとっては最も重要な宗教的行事である。

オ 花祭りは灌仏会ともいい、釈迦が死去（入滅）した日に執り行われる儀式である。

【解説】涅槃とは人の死に関わる観念であり、涅槃会はブッダ（釈迦）の死と結びついた祭りである。花祭りはブッダの生誕を祝う祭りである。日本では4月8日に行われる。復活祭はイエス・キリストの受難と刑死の後に起こったとされる復活の出来事を祝っている。過ぎ越しの祭りは、神がイスラエルの民をエジプトの奴隷の状態から救い出したことを祝う祭りだが、今でも大事な祭りとしてユダヤ教徒の間で行われる。

[176] 現代の日本や世界の葬法に関わる説明として適切なものを、次から2つ選びなさい。

ア 自然葬は最も古くからの葬法で、家の床下などに葬るやり方である。

イ 樹木葬というのは、近代中国で盛んになったもので、遺体を葬った場所に樹木を植えて目印とするものである。

ウ 鳥葬と呼ばれる葬法があるが、これはアフリカ北部に多くみられる。

エ 日本では江戸時代は土葬が多かったが、明治以降火葬が急速に普及した。

オ イスラム教では中東地域に限らず基本的に土葬である。

【解説】日本では明治以降、火葬が普及したが、イスラム教では土葬が基本であり、火葬は強く忌避される。それは、イスラム教における地獄は火の燃え盛るところと描写され、火葬は地獄の業火による責め苦しみを連想させるためである。日本では条例によって土葬が禁止されているところが多く、イスラム教徒はしばしば墓地問題に直面する。近年日本で行われるようになった自然葬や樹木葬は、墓地不足、あるいは華美な葬儀を避けるなどが理由として考えられる。